むなかた

葉月（はづき） 第678号

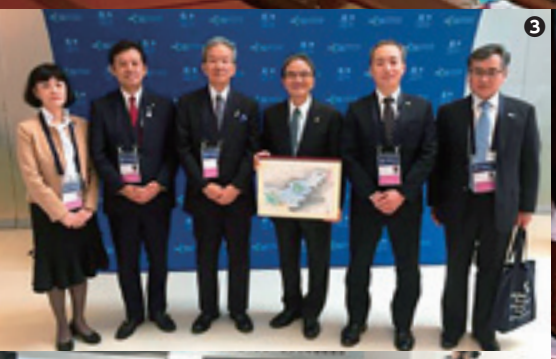
目次

3・2 世界文化遺産に登録決定
4 中津宮七夕祭
5 神宮神宝より紐解く
6 神宝館だより・造営日記
7 宗像大社歌会詠草
7 御造営奉賛者御芳名

よてき　七月十五日早朝に博多祇園山笠のクライマックス「追い山」が盛大に斎行された。山笠は博多の町だけではなく県内各所で行われている当社では、大島・中津宮にて祇園祭が斎行され、島民一体となり山笠が舁き出す。氏子区域では他に、田熊山笠・津屋崎山笠等が行われ、現在では夏の風物詩となっているが、元々は疫病退散の祈願を発祥としている▼夏の疫病退散・無病息災を祈る神事は祇園祭だけではなく、七月晦日の夏越祭・大祓式、九月一日の風鎮祭など、穢れを祓い、自然の脅威を鎮める祈りが捧げられている▼近年、九州北部豪雨や全国各地で自然の異常現象により、多くの災害が発生している▼古代より無病息災・自然災害に対する祈りは、全国で行われている。神道の祈りの原点にある自然への畏怖畏敬の念を忘れてはならない。（日）

41st Session of the World Heritage Committee
Poland 2017
41e session du Comité du patrimoine mondial
Pologne 2017

1



3

2

5

6

4

『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群
世界文化遺産登録

沖ノ島のみが登録に値するというイコモス勧告を覆し、全資産が登録された。
十五年にも及ぶ世界遺産登録活動が最高の形で結実した。

七月八日、深夜一時、当大社目の前の海の道むなかた館（市郷土文化学習交流館）では世界遺産登録の瞬間を見守ろうと、宗像、福津両市民と行政関係者ら約三百人が集い、ポーランドのクラクフで行なわれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産委員会審議の中継を今か、今かと見守っていた。同一時三十分、「本日の審議終了、明日は夕方五時から中継を行います。」との通訳の声に皆、落胆。疲れた様子で会場を後にした。

七月九日、確実に今日、決定するということもあってか、前日よりも多くの約四百人の市民らが中継を見守った。二十一ヶ国の委員らが順番に意見を述べると、「八資産を切り離すことは出来ない」「一括登録すべきだ」という言葉が…もしかすると…。日本時間十七時四十七分、全資産の一括登録が知らされると、会場は歓喜に包まれた。涙を流す人、喜ぶ人、そこは笑顔であふれていた。この瞬間に『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群は世界遺産一覧表への正式な記載が決定した。

喜びに沸いた二年前の国内推薦候補決定、今年五月のイコモス勧告により危機にさらされたが、最後は市、県、政府一丸となり勧告を覆しての一括登録。最高の結果となった。

平成十四年より始動した世界遺産登録推進活動。地域の小さな声がやがて宗像市、福津市、福岡県の行政を巻き込み、賛成、反対などの意見を集約しながら、十年以上の歳月を費やし、ようやくたどり着いた世界文化遺産登録。

今後は、宗像の歴史に込められた、先人達の叡智を基に、未来に向けた取り組みを地域の人々とともに考え、宗像の自然、文化、信仰をより強固に守り伝えて行かなければならない。

誌面を借り、十五年にも及ぶ登録活動にご尽力頂いた関係者の皆様に心より御礼を申し上げたい。

❶第41回世界遺産委員会（ポーランド・ICEクラクフ・コングレスセンター）❷『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群審議の様子。❸登録後の文化庁長官をはじめとする地元関係者。❹❺❻海の道むなかた館審議中継、登録瞬間。

中津宮七夕祭
―七夕発祥の由縁に迫る―

来る八月七日午後八時より筑前大島の中津宮境内を流れる天の川を挟んで祀られている末社牽牛社と織女社において七夕祭が斎行される。

この七夕の物語や風俗は、中国古来の伝説と乞巧奠（※手芸や裁縫の上達を願う儀式）の風俗とが伝来し、我が国固有の棚織女（※年に一度、水辺の機屋で神とともに一夜を過ごす聖なる乙女）に関する信仰に習合されたとするのが通説となっている。

同社における七夕神事は『正平年中行事』（一三四六）に「七夕虫振神事」とあり牽牛社、織女社に参籠し、水に映る姿によって男女の縁を定める信仰が記されており、また福岡の儒学者貝原益軒が著した『筑前國續風土記』でいうように早く『石見女式髄脳』や『古今集榮雅抄』の歌論書に見えるところから少なくとも鎌倉時代にまで遡る信仰といわれている。さらに両著は京で成ったものであることから、当宮の七夕信仰は古くから中央にまでその名の知られていたことが窺われる。

現在の摂末社には織幡神社、縫殿神社があり、古記によると応神天皇の御代、中国より帰化した阿知使主が遣わされた呉國から筑紫に帰還した際、天皇と宗像大神に織女（兄媛）を献上したとされ、爾来宗像大神は機織の業に深い縁故を有し、織縫の技は大神の奉仕から起って各地に伝播したとある。この御由緒からも当地が当時の一大産業である機織業を早くから取り入れていたことがわかる。

昭和一六年に同宮に参拝された武田祐吉文学博士は境内に立たれ「織女社」「牽牛社」「天の川」「かささぎ橋」の神聖さを見られ、日本の七夕信仰はここに始まる、とされて『いかなれば　とだえそめけむ天の川　あふせにわたす　かささぎのはし』と詠まれた。

これらの物語・風俗が筑前大島には今も形として伝えられている。

天の川にかかるかささぎの橋
武田博士の詠まれた和歌が刻まれた石碑

神宮神宝より紐解く 2

元神宮式年造営庁技師　釆野　武朗

装束神宝は、大きくは「装束」と「神宝」に区分されます。装束は儀式が行われる際に殿舎の中やその周りの庭上をその目的に沿って飾り立てる事を言いますが、広い意味では飾り立てられる品自体も装束と呼ばれ、神宮においてはその多くが後者の装束として扱われています。ではそれぞれの用途と員数を次に分類して掲げます。

羅紫御翳（らのむらさきのおんさしは）

※神宮司庁提供

一、殿舎の舗設具　八九点

御壁代四八条　御幌四一条

二、神座の舗設具　二三七点

御蚊屋三二条　御天井一六条

御帳三九条　納綿御被　八五条

袷御被六五条

三、服飾、容飾及び

それらに関連する品　四七七点

御衣六五領　御裳五一腰　御袴四腰

御帯五八条　御比礼一二条

御意須比一二条　御巾一二条

御袜一二条　御新羅組三八条

御加美阿弓八条　御髻結四二条

御枕四基　御履四両　御櫛笥一八合

御襪一〇両　御鏡二六面

御白玉八一丸　御衣筥三合

御荒筥一合　奉座楊筥一六合

四、遷御路程の威儀具　二八二点

御蓋三具　御翳　六柄　御笠四枚

垣代一六条　行障　三二条

仮御樋代　或　御船代料六〇条

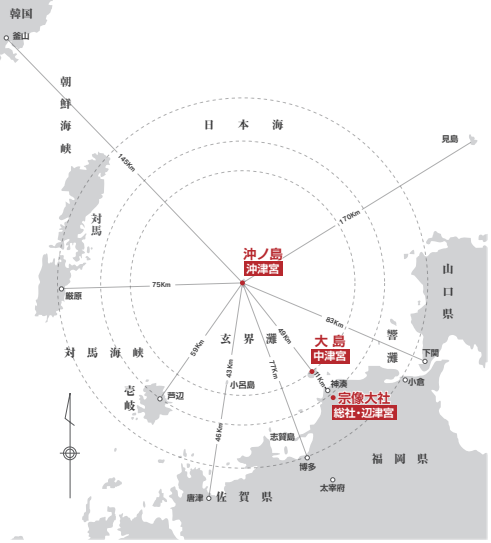
御道敷一六一端

以上それぞれの用途に応じた員数を記しましたが、これらの品目には御鏡を納める轆轤筥、また御枕、御襪、御履などを納める楊筥など、その附属御料が皇大神宮で七四点、豊受大神宮で二六点、皇大神宮の別宮で一三三点、豊受大神宮の別宮で四四点、合計で二七七点あり、この附属御料は各品目の員数内に包含されています。即ちこれら附属御料は装束神宝の品目員数としては、計上されていないため、実際に調製し奉献する御料の数は、前回で述べました臨時品と同じく規定の員数より更に膨らみます。

ここで余談ですが装束の御料類は、次回述べます神宝の御料より概して形状の大型な品目が多くあり、神宝御料の製作に求められる精緻な完成美とは一風違う荘厳な装飾美が随所に施されています。特に威儀具においてのそれは、壮大な造形に手の込んだ飾り金具を据え、丹精な織物を張るなど、皇大神宮御料の赤紫綾御蓋や羅紫御翳にその例を見ることが出来ます。

神宝館だより 5
八万点ノ国宝収蔵

先月九日、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録が正式決定した。イコモスは、八つの構成資産のうち四つの資産を除外するよう勧告していたが、勧告は覆り、すべての資産の一括登録となった。決定の瞬間、地元市民や関係者が歓喜に沸いた光景は記憶に新しい。沖ノ島の考古学的価値のみを評価したユネスコの諮問機関の除外勧告は実に厳しく、四つの資産を復活させることは難しいとの見方があった中、日本側は、宗像大社三宮一体の信仰の継続性やその信仰を担い発展させた宗像氏の足跡を訴え続け、逆転一括登録を実現した。ここで、改めて、当大社所蔵品をもとに、三宮での祭祀の始まりに主眼をおきながら祭祀の継続性について述べていきたい。



三宮は海と海浜にまたがる広大な神域で構成されている。

宗像大社は、宗像市の中央を貫流する釣川河口付近の田島の辺津宮、その沖合の宗像市大島の中津宮、さらに約五〇km先の玄界灘の大海原に浮かぶ沖ノ島の沖津宮から成る。御祭神宗像三女神の鎮座地について、『古事記』には「胸形之奥津宮」、「胸形之中津宮」、「胸形之辺津宮」、『日本書紀』第六段第二の一書には「遠瀛」、「中瀛」、「海瀛」とあり、この記述から、宗像大社の祭祀は記紀成立時には既に沖ノ島、大島、本土の海浜部に展開し、現在のような三宮の構成は遅くとも八世紀には成立していたと考えられてきた。近年、調査された大島の祭祀遺跡や出土品、宗像大社の境内地などからの採集品により、記紀編纂時の宗像大社三宮の構成を考古学的に裏付けることが可能となってきている。次回から具体的に紹介しよう。（福）

時満ちて道ひらく 造営日記 35
～第二宮・第三宮修復工事～

鳥居、瑞垣の修繕を終え、第二宮・第三宮境内がようやく修復前の姿になってきた。鳥居の柱は新材に取替え、笠木・貫は既存の部材を用いた。瑞垣については削り直された部材に併せ、神宮より下賜された古材を用いて修繕された。現在は、社殿周りの整備並びに細部の仕上げを行っている。

第672回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

巻舌のシャンソン歌手をまねながらせまき厨に一人りで笑う　池浦千鶴子

フランス語を真似て笑ってしまった作者。初句〈～で〉下の句〈一人の厨で声たて笑う〉。

草一本ひくに三秒かかるとて小三・諒太のまなこかがやく　山本　静子

草むしりにかかる時間を発見した諒太君の笑顔が見えるよう。三句〈かかると言い〉に。

十日目の雨は畑にしみとほり苗取りの苺生き生きとせり　佐々木和彦

慈雨という言葉がぴったりの雨だろう、良い歌。結句を〈葉の生き生きす〉としても。

膝に抱く納骨箱はゆれぬようコツと親父の挙骨を聞く　早川　祥三

骨箱が揺れた拍子の音に父上をしのぶ作者。二・三句は〈～の揺れるとき〉。

腰痛に足よろめけばディケアの肩かり歩む落葉の庭を　豊田ミツ子

上手に人の助けを借りるのも大切な作者の知恵。三句は〈ディケアで〉に。

かくれゐて笑ひこらへる子のやうに六月の葉のかげに梅の実　山﨑　公俊

梅の実の比喩が効いている。季節は分かるので、下句〈しげる葉陰の青き梅の実〉。

杖なくば歩けぬ身には足元を跳ぶ蛙さえ尊く眩し　森　龍子

蛙の命を尊く思う作者。二句〈歩けぬわれは〉結句は尊しは言わず〈眩しく見おり〉。

ふつくらの「おてて」となりて痛がりぬ母の手首のレントゲン見つむ　北野カズミ

高齢の母上の災難。下の句〈母の手首のX線写真見る〉。おてては括弧を除けお手々と。

下校時に両手を広げ子を守り道を渡らす法被のボランティア　萩原　勉

登下校の見守り。二句以下〈道わたる子らを守りおり法被のボランティア両手を広げ〉。

幾年も係(かか)り集めし美術品最期の展覧観客賑(にぎ)やふ　秋吉　嘉

感慨深い作者。順序を変え、〈観客で賑わいており一生(ひとよ)かけ集めし美術品最後の展示〉。

西陽(にしび)受け川面(かわも)に光の帯流れ遠い海へと祈りを運ぶ　本田エリナ

美しい一首。初句～四句まで〈午後の陽に川の面(も)ひかりの帯となり遠くの海へ〉。

初夏の日に石河原の丸石のあえぎのような陽炎がたつ　吉崎美沙子

発想が面白い。初夏なので〈あえぎ〉を抑え、〈吐息のような〉としてはいかが。

◆選者詠

夕食用青紫蘇つみに出でてきて小さきバッタの跳梁を見る

夜の駅にエレベーターが昇り来ぬ床にみどりのかなぶん乗せて

第645回　俳句

朝顔の双葉ハートが天をつく　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（平成二十九年六月）
（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円
中央区　東野　行恭
福岡市　博多21の会

五〇、〇〇〇円
江東区　中村　幸雄

三〇、〇〇〇円
米子市　三澤　雅史

一〇、〇〇〇円
生駒市　渡部一博・信子
金沢市　梶谷　晋弘
さいたま市　細淵晶記子

五、〇〇〇円
尾張旭市　伊藤　絹代
呉市　桝井　康生
下関市　大元　勝二
杉並区　勝谷　桂子
中央区　西邑　清志
中央区　原田　雅美
千代田区　中本　真理
中野区　脇山　眞幸
名古屋市　村川　充江
新座市　金井　都
八王子市　番場　嘉雄
福津市　森　清美
箕面市　山田　和裕
八尾市　豊崎　倫臣
横浜市　笠井　雅紀

四、〇〇〇円
出雲市　公田　仁志

三、〇〇〇円
大阪市　福地　昭義
川越市　内海　勝
熊谷市　内田　豊治

二、一〇〇円
青森市　江利山正春

二、〇〇〇円
姶良市　大西　茂・妙子
朝倉市　矢野　宙之
天草市　川内美穂子
板橋区　浅賀　宗和
伊万里市　牛島　隆治
大分市　江藤　有芳
大野城市　大津山成人
鹿児島市　上園　真澄
鹿屋市　今熊菜々海
鹿屋市　今熊　浩輔
鹿屋市　今熊　千春
嘉穂郡　吉貝利喜・浩美
北九州市　白木　元助
北　区　能城　正子
佐世保市　濱田　宗一
志布志市　小野　四男
下関市　松本　祐子
鈴鹿市　寺垣　順一
高崎市　加納美穂子
垂水市　梅本　道治
広島市　井上ゆかり
福岡市　平井　敦子
文京区　細淵ゆり子
米子市　三澤　雅史

むなかた
葉月（はづき） 第678号
2017年8月1日発行（月刊）／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話（0940）62―1311（代）　http://www.munakata-taisha.or.jp/

8月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き　高宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
7日	中津宮七夕祭 於＝大島・中津宮	午後8時
15日	総社月次祭 引続き　高宮祭	午前11時
	宗像護国神社戦没者慰霊祭 於＝宗像護国神社	午後7時

編集後記

七月九日、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界文化遺産に登録された。決定の瞬間は歓喜にわき、涙を流す人々もいた。登録にむけて活動してこられた人の思いの大きさを目の当たりにした▼評価された沖ノ島の考古学的価値は、宗像三宮で紡いできた信仰により守られ、成り立っていることを発信し続けた。今回それが国際的に認められた瞬間であった▼ここがゴールではなく、スタートである▼先人たちより受け継いだ古代より連綿と続く宗像の信仰・文化を後生に遺す役目が私たちにはある。（黒）

宗像大社